

幼年児童教育研究 第30号 2018

# 母親の養育態度及び育児不安が幼児の自己制御機能に及ぼす影響

The effects of mother's childrearing style and child care anxiety on children's self-regulation.

前田（鈴木）亜由美

本研究は母親の養育態度（権威的態度、権威主義的態度、許容的態度）と育児不安（高群、低群）の組み合わせによって把握される養育パターンが、幼児の自己制御機能にどのように影響しているのかを明らかにすることを目的とした。公立幼稚園に通う4～6歳の幼児を持つ母親576名に質問紙を配布し、480名から回答を得た。その中で分析対象として、4～5歳の幼児を持つ母親376名に絞った。分析は、養育態度（権威的養育態度、権威主義的養育態度、許容的養育態度）×育児不安（高群、低群）の対応のない二元配置の分散分析を行った。結果、幼児の自己抑制には、母親の養育態度と育児不安がそれぞれ独立に影響し、自己主張は、母親の養育態度と育児不安が相互に関連し影響していた。したがって、幼児の自己制御機能を検討する際には、従来のように母親の養育態度に加えて、今後育児不安にも一層着目する必要があることが明らかになった。

## 問 題

幼児期の中核的な発達課題として、自己制御機能の発達があげられる。その背景に、乳児期では、子どもの欲求や要求に基く行動は、おおむね親をはじめとする養育者や保育者によって基本的に受容されるが、幼児期になると、動作や行動がそれ自体で問題にされるのではなく、何のためにそれをし、他者にどういう影響をもたらすのかを意識することが要求され、社会的、対人的意味が問われることが考えられる（岡本、2005）。幼児の自己制御機能には、「自分の意思や欲求を明確に持ち、これを他人や集団の前で表現し主張する」という自己主張的側面と、「集団場面で自分の意志や欲求を抑制・制ししなければならないとき、これを抑制する」という自己抑制的側面とがあり、幼児はこの2つの側面を持ち合わせて、自己を表出していく（柏木、1988）。自己の表出の仕方は、「自己の実

現」と「他者との関与」という側面をどう統合していくかによって変化する。首藤（1995）は、柏木と同様、幼児の自己制御機能を自己主張的側面と自己抑制的側面からとらえ、自己制御機能の個人差が幼児の向社会的行動とどのように関連するのかを検討している。結果、自己主張が高く自己抑制が低い幼児は、仲間に対する自発的な向社会的行動を多くとっており、自己主張・自己抑制ともに高い幼児は、仲間からの依頼に応えた向社会的行動を多く行っていた。では、幼児は各々の自己制御機能をどのように身に付けていくのだろうか。幼児の自己制御機能は、場面に応じて多様な形で発現し、展開していく。家庭での親や同胞との関係や、近隣での友達との関係、さらに保育園・幼稚園での保育者や友だちとの生活の中など、新たな場面に会うたびに、幼児はその都度、自己を制御することを迫られる。その出発点は家庭での親との

関係にあり、それがその後の友達関係や集団保育場面での行動につながっていく（柏木、1988）。

このように、幼児期的人格形成において、親の養育が及ぼす影響は大きい。特に、愛着関係が成立している特定の人（一般的には母親）の重要性は多く指摘されるところである。しかし、近年、親の不適切な養育や育児不安が問題視されている。田中（1997）は、幼児を養育することは、両親にとって大きな喜びであるが、親役割の獲得、新たなスキルや責任の獲得、自由な行動の制約を伴うものであり、時として大きなストレスの源泉となりうると述べている。幼児を養育するにあたり起こりうる、対処不可能なことや有害性のあるものが、不適切な養育や育児不安を引き起こす要因となっていると言えよう。

そのような背景において、親の養育態度と育児不安が、幼児の自己制御機能にどのような影響を与えるのかを改めて検討することは十分意義深いものと考ええる。まず、この主題に関連する先行研究を概観していく。

#### （1）親の養育態度と幼児の自己制御機能との関連

養育態度とは、親などの養育者が子どもを育てる際にとる態度、行動のことをいう（南、1999）。

森下（2000）は、家庭での幼児の自己制御機能に対して、母親の養育態度と養育スタイルがどのような影響を与えるかについて検討している。結果、男児の場合、年中児では、母親の受容的態度が自己主張を育むことが示された。しかし、年長児では、母親の受容得点が高いと、自己抑制が高く自己主張が低い幼児と、その反対に自己主張が高く自己抑制の低い幼児が見られた。これは、母親の受容的態度が幼児の自己制御機能を必ずしも高めるという訳ではないこ

とを示唆している。女兒の場合は、母親の受容的態度が、幼児の自己抑制を育むことが示された。さらに、母親の統制的態度は幼児の自己主張の発達に、力中心の養育スタイルは自己抑制と自己主張の発達に共にマイナスの影響をもたらす危険性があることが示唆されている。

一方、戸田（2006）の研究では、幼児の自己主張と、母親の養育態度として服従的、過保護、甘やかしに負の関係が見られている。また、幼児の思いやり行動と母親の過保護に負の関係が見られている。つまり、幼児の自己主張については、母親が心配するあまり、結果的に幼児の行動を自分の思い通りにさせようとする過保護や、幼児の言いなりである、服従的、甘やかしといった養育態度がマイナスの影響を及ぼしていることが明らかにされている。森下（2000）の研究では、母親の統制的態度や力中心の養育スタイルが幼児の自己主張にマイナスの影響を与えていた。しかし、戸田（2006）の研究では、統制的な養育態度と捉えることのできる過保護と、過度な受容の養育態度と捉えることのできる甘やかしや服従的養育態度がマイナスの影響を与えている。これらの研究により、幼児の自己制御機能の発達を疎外する母親の養育態度が明らかにされたのだが、戸田（2006）の研究では、服従的態度や甘やかしといった過度な受容的養育態度も、マイナスの影響を与えていることから、両研究の結果は異なっていることと言える。

中道・中澤（2003）は、父親、母親の養育態度をそれぞれ調査し、幼児の攻撃行動との関連を検討するとともに、両親の養育態度の組み合わせによる幼児の攻撃行動の違いを検討している。結果、報復的攻撃行動は、父親が権威主義的養育態度をとる場合に高くなり、両親の組み合わせについては、両親がともに権威主義的養

育態度をとる幼児は、攻撃行動が最も多く、両親が権威的養育態度である幼児は攻撃行動が最も少ない傾向が見られた。

尾崎・小野（2007）の研究では、父母の養育態度が幼児の自己制御機能にどのような影響を与えるかについて検討している。結果、幼児の自己抑制に対して、父親の非難的養育態度が影響を与えており、特に男児に対して、父親が非難的であるほど、自己抑制は低いことが示されている。しかし、幼児の自己主張については、父母の養育態度の影響は見られなかった。さらに、母親の養育態度に関しては、幼児の自己主張、自己抑制との間に影響は見られなかった。

このように親の養育態度と幼児の自己制御機能との関連については様々な知見が提示されているが、統一的な見解が打ち出されているわけではない。例えば森下（2000）の研究では、母親の統制的態度や力中心の養育スタイルが幼児の自己制御機能の発達にマイナスの影響をもたらすとしているが、戸田（2006）は、幼児の自己主張と母親の甘やかしといった、過度な受容的養育態度との負の相関関係を明らかにしている。さらに、尾崎ら（2007）の研究では、父親の養育態度が幼児の自己抑制に影響を与えているが、自己主張には影響を与えていない。しかし、中道ら（2003）の研究では、父親の養育態度が、幼児の自己主張の一種とも取れる攻撃性に影響を与えている。両研究において、母親の養育態度は父親に比べて、幼児の自己制御機能に対して影響を与えないとされている。

このような見解のずれが生じた理由としては、第一に親の養育態度を測定する尺度がそれぞれの研究で異なることが挙げられる。第二に、親の養育態度は行為として表面化したものであり、その背後にある親の心理状態によって、幼児の発達特徴に与える影響は異なっているものと考

えられる。しかし、こうした観点からの研究はほとんどなされていないのが現状である。そこで、本研究は、親の背後にある心理状態の一つと考えられる育児不安について着目していきたい。

## （2）親の育児不安と幼児の発達特徴との関連

育児不安は近年提示された概念であり、十分な定義づけがなされているわけではない。不安とはネガティブな情動の1つで、自己存在を脅かす可能性のある破局や危険を漠然と予想することに伴う不快な気分のことである（生和、1999）。ラザラスとフォルクマン（1991）は、個人が環境からの要求に直面した場合、それがその個人にとって重要な関わりを持ち、害や脅威、対処努力をもたらすものであると評価されると（一次的評価）、ネガティブな情動が喚起されるとした。さらに、その要求をコントロールできるか否かの二次的評価を行うことで、情動の種類や強度を規定するとしている。つまり、不安は事態を脅威的だと認知することにより生じる認知媒介型の情動であると捉えることができる。

これらを踏まえた上で、本研究では田中・尾添（1996）を参考にし、育児不安を、育児を行う上で起こった出来事を、自分自身では対処不可能だと認知した時に生じる情動と定義する。

育児不安に影響を与える要因については、例えば、子どもの障害、親自身のパーソナリティ、ソーシャルサポート等が検討の対象とされてきた（渡辺・岩永・鷺田、2002；興石、2002；田中・尾添、1996）。しかし、幼児の発達特徴との関連性については十分に研究がなされていない。その中でも例えば、武井・寺崎・門田（2006）は、幼児の気質と養育者の育児不安との関連性を明らかにし、養育者の育児不安を予防、低減するために必要な対応について考察し

ている。結果、育児を行う上での扱いにくさを示す「否定的感情反応」で表わされる気質特徴を強く示す幼児の養育者は、自分が育児をすることに對する不安を示す「中核的育児不安」、子どもあるいは子育てに否定的な感情を示す「育児感情」が共に高くなった。さらに幼児の几帳面さや敏感さを示す「神経質」、食事や睡眠のリズムが規則的であることを示す「規則性」で表わされる気質特徴を示さない幼児の養育者は、育児のために自分の行動や時間に制限を感じるといった「育児時間」に関わる育児不安が高くなることを明らかにした。

さらに、鎌倉・小堀・坂田・鈴木・藤本・糸井（2000）は、幼児の自己制御機能に影響を与える要因として、母親の不安傾向と幼児の気質を想定して研究している。結果、幼児の自己制御機能には、幼児期の気質と母親の特性不安が影響していることが見出された。

このように武井ら（2006）の研究においては、育児不安に影響を与える要因として幼児の気質が問題にされている。しかし、育児不安が親自身のパーソナリティやソーシャルサポートに規定されることから考えると、幼児にとって、いわば所与の条件として親の育児不安があるともいえるのではなかろうか。また、鎌倉ら（2000）の研究においては、母親の不安傾向が、乳幼児期の気質を介して、幼児の自己制御機能に影響を与える可能性を示唆している。そこで、本研究では親の育児不安が幼児の自己制御機能の発達にどのような影響を与えるのかを検討する。

### （3）親の養育態度と育児不安の関連

親の養育態度と育児不安との関連を見た研究は十分になされていない。

その中でも、三ツ元・藤原（2005）は、幼児期の子どもを持つ母親の育児不安と、子ども

観・養育態度の関係について検討している。結果、育児不安が最も高いのは、子育てにおいて制約や負担を感じる事が多く、子どもに対して拒否的な養育態度をとる母親であり、また、育児不安が最も低いのは、子育てにおいて充実感や楽しみを感じ、「外向的傾向」のような社会的で積極的な養育態度をとる母親であることを明らかにした。

三鈷・濱口（2009）は、幼児期の子どもを持つ母親の、子どもの問題行動に対する養育スキルパターンを類型化し、育児不安との関連を検討している。結果、子どもに対する注目や援助的な関わりが最も少なく、感情的に叱責することが多い懲罰的養育群は、育児不安が最も高かった。子どもの良い行動に対して物的報酬でご褒美をあげ、子どもの行動への注目も多い物的報酬・きげんとり群、子どもの不適切な行動に対して無視し、子どもの望ましい行動に対して物的報酬を与えることが少ない不適切行動無視群は、育児不安については中程度であった。子どもに対する注目が多く、感情的な叱責が少ない注目・援助群は、育児不安が最も低かった。

藤本・小堀・鈴木・鎌倉・糸井（2003）の研究では、母親の不安を状態不安と特性不安の二つの側面から捉え、母親の養育態度、子ども観に与える影響を検討している。結果、現在の不安状態である状態不安は、拒否的養育態度にマイナスの影響を与え、受容的な養育態度にプラスの影響を与えていた。こうした結果から、母親の不安が適切であれば、子どもを十分に受容し育児を促進する可能性があることが述べられている。

これら一連の研究によって、親の養育態度と育児不安に、関連性があることが示されてきた。しかし、先述のように育児不安の実証的研究は端緒についたばかりであり、概念規定そのもの



が不明確な上、測定尺度も様々である。さらに、親の養育態度と育児不安との関連が見られているものの、それらの組み合わせによって把握される養育パターンが幼児の発達にどのような影響を与えるのかを検討したものは見られない。

そこで本研究では、親の養育態度の背後にある心理的要因として、親の育児不安を取り上げる。さらに幼児の発達の特徴についてはこの時期の発達課題となる自己制御機能に着目し、母親の養育態度と育児不安が与える影響について検討をする。

## 目 的

先行研究から、幼児の自己制御機能の発達には、親の「養育態度」と「育児不安」が影響を与えているものと考えられる。そこで本研究では、母親の養育態度（権威的態度、権威主義的態度、許容的態度）と育児不安（高群、低群）の組み合わせによって把握される養育パターンが、幼児の自己制御機能にどのように影響しているのかを明らかにすることを目的とする。

本研究は、探索的な研究であるため、具体的な仮説は設けられないが、母親の養育態度と育児不安は交互に関連し、幼児の自己制御機能に何らかの影響を与えることが予想される。

また、今回は母親のみを対象者として着目した。ただし、前述のように、父親と母親が幼児の自己制御機能に与える影響については異なることが予想されるが、先行研究においても、一貫した結果が認められていない。本研究の目的は、親の養育態度と育児不安の二つの要因が、幼児の自己制御機能に影響を及ぼすのかを検討することである。そこで、今回はまず、対象者を主たる養育者である母親のみに絞り、基本的な知見を得たいと思う。

幼児の自己制御機能の発達は研究によって、

様々な見解がある。柏木（1988）は、3～6歳の幼児を対象として自己制御機能の発達を検討している。結果、自己抑制は、年齢の上昇に伴って、増加することを示した。それに対し、自己主張は、3歳～4歳5ヶ月までは上昇するが、それ以降は、変化があまり見られないことが示された。5歳以降は、自他の調整に基づいて行動することが多くなることから、自己抑制が増加し自己主張は変化しなかったと考えられる。よって、本研究では、幼児の自己制御機能の発達の変化が顕著に認められる、4歳～5歳児を対象を絞ることにする。

## 方 法

### （1）研究デザイン

独立変数を母親の養育態度（権威型、権威主義型、許容型）と母親の育児不安（高群、低群）、従属変数を幼児の自己主張得点、自己抑制得点とした対応のない2要因計画<sup>1)</sup>。

### （2）調査対象

公立幼稚園に通う4～6歳の幼児を持つ母親576名に質問紙を配布し、480名から回答を得た。回収率は83.3%であった。その中で分析対象として、4～5歳の幼児を持つ母親376名に絞った。また、本研究では、日々の生活で一番幼児と触れ合う時間が多いとされており、主たる養育に当たる母親のみに対象者を絞り、まず基本的な知見を探ることにした。幼児の年齢は、自己制御機能の発達の変化が表れやすい年齢と考えられる4～5歳に限定した。

### （3）調査方法

H県内の8つの公立幼稚園に調査協力を依頼し、質問紙を配布した。回収は、配布後1週間以内に各園の担任の先生が中心となって行った。調査時期は、平成22年6月下旬から9月下旬であった。

#### (4) 調査内容

##### 1) フェイスシート

母親の年齢、子どもの年齢、性別を尋ねた。

**2) 母親の養育態度尺度 (Table1) :** 母親の養育態度について、中道ら (2003) の「親の養育態度尺度」を用いた。この尺度は「応答性」に関する8項目、「統制」に関する8項目、計16項目からなっている。回答は「非常にあてはまる (4点)」「まあまああてはまる (3点)」「少しあてはまる (2点)」「全くあてはまらない (1点)」の4件法で評定してもらった。(逆転項目については、「全くあてはまらない (4点)」～「非常にあてはまる (1点)」)。次に各対象者について、応答性に関する項目と、統制に関する項目に対する評定値の平均値を算出し、それぞれ応答性得点、統制得点とした。さらに、応答性得点と統制得点の全体平均を算出し、それを基準に各対象者の養育態度を分類した。この尺度は、3つの型に養育態度を分類できる。まず、統制得点が平均以上の対象者のうち、応答性得点が平均以上の対象者は「権威的態度」、応答性得点が平均以下の対象者は「権威主義的態度」として分類される。また統制得点が平均以下の対象者は「許容的態度」とをとるとされる。

**3) 育児不安尺度 (Table2) :** 育児不安について、既存の育児不安尺度項目 (手島・原口、2004) を参考にした。その中でも、育児不安の定義に沿った、中核的育児不安 (自分が育児をすることに対する不安) を測定する8項目を用いた。回答は「非常にあてはまる (4点)」「まあまああてはまる (3点)」「少しあてはまる (2点)」「全くあてはまらない (1点)」の4件法で評定してもらった。次に、各対象者について、8項目の評定値の平均値を算出し、育児不安得点とした。さらに、育児不安得点の全体平

均を算出し、それを基準に各対象者を育児不安高群、低群に分類した。

**4) 幼児の自己制御機能尺度 (Table3) :** 幼児の自己主張・自己抑制について、首藤 (1995) を用いた。この尺度は自己制御機能を測定する20項目であり、「自己主張」8項目、「自己抑制」12項目からなる。回答は「きわめて多い。非常にしばしば見られる (5点)」「やや多く見られる (4点)」「ときどきある。普通程度見られる (3点)」「あまり見られない。少ない方である (2点)」「ほとんどない。きわめて少ない (1点)」の5件法で評定してもらった。(逆転項目については、「ほとんどない。きわめて少ない (5点)」～「きわめて多い。非常にしばしば見られる。 (1点)」)。次に、対象者ごとに、自己主張得点として項目 (1) ～ (8)、自己抑制得点として項目 (9) ～ (20) の平均値をそれぞれ算出し得点化した。

1) 幼児の性別による結果の相違が認められる可能性が考えられるため、性の要因も含めて3要因分散分析を行ったが、幼児の性差が関わる主効果や交互作用は一切認められなかった。

## 結 果

### (1) 調査対象者の属性

本研究では、対象者全員が母親であった。母親の年齢は、26歳から45歳まで、平均年齢は35.52歳 (SD=4.41) であった。対象者の幼児は、4歳から5歳まで、平均年齢は4.76歳 (SD=0.43) であった。幼児の性別は、男児182名 (48.40%)、女児194名 (51.60%) であった。

### (2) 母親の養育態度及び育児不安と幼児の自己制御機能得点との関連

まず、養育態度尺度の評定値をもとに、各母親の応答性得点と統制得点を算出した。各得点の平均値を基準に、各母親の養育態度を分類した。応答性得点の平均値は（2.86点）、統制得点の平均値は（3.47点）であった。結果、対象者376名のうち、134名が権威的養育態度、93名が権威主義的養育態度、149名が許容的養育態度に分類された。

次に、育児不安尺度の評定値について平均値を算出した（2.11点）。これを基準に各母親を育児不安高群（175名）と低群（201名）に分類した。母親の各養育パターン的人数は、以下のTable4の通りである。さらに、母親の養育態度と育児不安に関連があるか、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、養育態度と育児不安には有

意な連関があることが認められた（ $\chi^2(2)=8.02$ ,  $p<.05$ ）。

#### 1) 幼児の自己抑制得点に対する母親の養育パターンの影響 (Figure1・Table5)

まず、母親の養育態度及び育児不安が、幼児の自己抑制得点にどのように影響しているのかを検討した。分析は、養育態度（権威的養育態度、権威主義的養育態度、許容的養育態度）×育児不安（高群、低群）の対応のない二元配置の分散分析を行った。その結果、養育態度、育児不安共に主効果が有意であった（それぞれ  $F(2,375)=7.88$ ,  $p<.01$ ,  $F(1,375)=10.15$ ,  $p<.01$ ）。養育態度と育児不安との交互作用は見られなかった。養育態度の主効果について、Bonferroni法による多重比較を行った結果、母親が権威的

Table1 母親の養育態度尺度

##### 応答性

- (1) 子どもが一人で遊んでいて、退屈そうだなと思った時、加わって一緒に遊ぶ。
- (2) 子どもを抱きしめたり、やさしい言葉をかけて愛情を示している。
- (3) 子どもがイライラしていると思った時、「どうしたの」と聞いてみる。
- (4) あなたが家にいる時、ボール遊びやゲームなど、子どもと一緒に過ごす時間を持っている。
- (5) どこかに出かけて、子どもが疲れていると感じた時、休んだり、子どもを抱っこする。
- (6) あなたが忙しい時、子どもが遊びたがっていても、遊ぶのを後回しにしてしまう。
- (7) 子どもが間違った行動をした時、どうしてその行動をしたのか理由を聞き、どうしたらよかったのかを話し合う。
- (8) 家族で遊びに行く時、親の都合だけでなく、できる限り子どもの行きたいところを取り入れる。

##### 統制

- (9) 子どもがあなたと決めた約束を守らない時、その約束をもう一度教える。
- (10) 図書館や映画館など静かにしなければならない場所では、子どもを静かにさせる。
- (11) 子どもが自分のやるべきことをやらない時、「やりなさい」と言う。
- (12) 買い物に行っておもちゃを買う予定が無い時に、子どもがおもちゃを欲しいと言って売り場から動かなくても、おもちゃは買わない。
- (13) 子どもが友達と遊んでいて、友達が使っているおもちゃを無理やり取ってしまった時、それを返させる。
- (14) 子どもが寝る時間になっても、遊んでいて寝ない時、そのままにしておく。
- (15) 子どもが自分のやっていることがうまくいかず騒いでいる時、静かにさせる。
- (16) 子どもがあなたに対して悪い言葉づかい（「バカ」「アホ」etc）をしたとしても気にしない。

●は逆転項目。

Table2 育児不安尺度

---

(1) 何となく育児に自信が持てない。
(2) 子育てに失敗するのではないかと思うことがある。
(3) 育児についていろいろ心配なことがある。
(4) 母としての能力に自信がない。
(5) この先どう育てたらいいのか分からない。
(6) どうしついたらよいか分からない。
(7) よその子どもと比べて、落ち込んだり、自信をなくしたりすることがある。
(8) 子どもの発育・発達が気にかかる。

---

Table3 幼児の自己制御機能尺度

---

<b>自己主張</b>				
(1)	勝ち負けのあるゲームで負けると泣いたり、怒ったりする。			
(2)	ひどい悪口を言われたり、からかわれると怒る。			
(3)	他の子どもと自分の考えが違っているときでも主張できる。			
(4)	入りたい遊びに自分から「入れて」と言える。			
(5)	遊びたいおもちゃを友達が使っているとき、「貸して」と言える。			
(6)	自分のやりたい遊びを友達を誘って始められる。			
(7)	考えをきいたり、感想を求めると、自分なりの考えや感想を出す(持っている)。			
●(8)	人からうながされないと行動が起こせない。			
<b>自己抑制</b>				
(9)	(ブランコやすべり台、おもちゃの貸し借りなど)遊びの中で自分の順番を待てる。			
(10)	遊びのルールが守れる(ズルをしたり、ごまかしたりしない)。			
(11)	他児のものが欲しくてもがまんする。			
(12)	「ちょっと待っていなさい」で待てる。			
(13)	仲間と考えの違うとき、相手の考えを受け入れられる(自分の考えだけを押し通そうとしない)。			
(14)	頼まれたことがいやなことや難しいことでも、がんばることができる。			
(15)	ままごと遊びやごっこ遊びなどで自分に決められた役ができる。			
●(16)	友達のものや他の子が使っているおもちゃが欲しいと、すぐにとる。			
●(17)	ちょっと失敗したりうまくいかないと、すぐにあきらめてしまう。			
(18)	「してはいけない」と言われたことは、しない。			
(19)	たたかれても、すぐにたたき返さない。			
(20)	ケガをしたり、血がでてもがまんできる、泣かない。			

---

●は逆転項目。

Table 4 母親の養育パターンの人数

---

育児不安	母親の養育態度			
	権威	権威主義	許容	総和
高群	51	53	71	175
低群	83	40	78	201
総和	134	93	149	376

---



養育態度の場合、幼児の自己抑制得点が、有意に高かった（権威的＞権威主義、許容）。

これらのことから、幼児の自己抑制得点については、母親の養育態度と育児不安がそれぞれ独立に影響を与えることが推察された。すなわち①母親の育児不安が高い場合に比べて低い場合、さらに②母親の養育態度が権威的な場合に、幼児の自己抑制得点が高くなることが明らかになった。

## 2) 幼児の自己主張得点に対する母親の養育パターンの影響 (Figure2・Table6)

母親の養育態度及び育児不安が幼児の自己主張得点に、どのように影響しているかを検討した。分析は、養育態度（権威的養育態度、権威主義的養育態度、許容的養育態度）×育児不安（高群、低群）の対応のない二元配置の分散分析を行った。その結果、養育態度の主効果が有意であり（ $F(2,375)=8.36, p<.01$ ）、育児不安の主効果は有意な傾向が見られた（ $F(1,375)=3.14, p<.10$ ）。養育態度の主効果について、Bonferroni法による多重比較を行った結果、母親が権威的養育態度の場合、幼児の

自己主張得点が、有意に高かった（権威的＞権威主義、許容）。

さらに、養育態度と育児不安の交互作用が有意であった（ $F(2,375)=3.13, p<.05$ ）。交互作用が有意であったので、下位検定を行った。まず、育児不安群別にみると、育児不安高群においてのみ、養育態度の単純主効果が見られた（ $F(2,174)=8.85, p<.01$ ）。つまり、母親の育児不安が高い場合、養育態度別に幼児の自己主張得点に変化することが示された。Bonferroni法による多重比較の結果、母親の養育態度が権威的養育態度の場合、幼児の自己主張得点が有意に高かった（権威＞権威主義、許容）。このことから、育児不安が高い場合であっても、母親の養育態度が権威的であれば、幼児の自己主張得点の高さは維持されることがわかった。さらに、養育態度別にみると、養育態度が権威主義的養育態度の場合、育児不安の単純主効果が認められた（ $F(1,92)=5.75, p<.05$ ）。このことから、権威主義的養育態度の母親の場合、育児不安が高いと、幼児の自己主張得点が一層低下することが明らかになった。

Figure1 母親の養育パターンと幼児の自己抑制得点

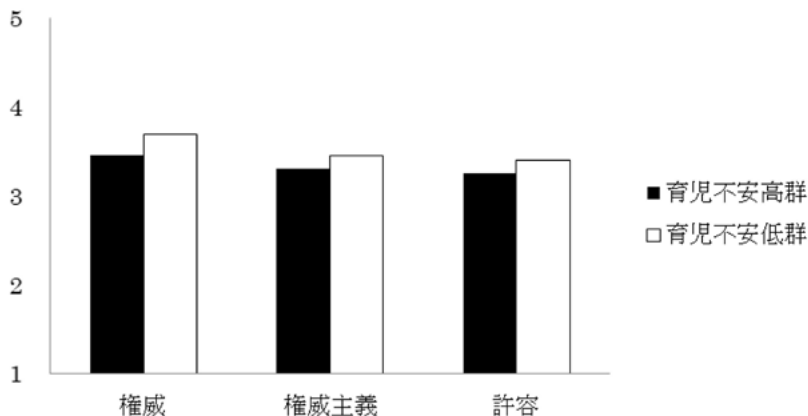


Table 5 母親の養育パターンと幼児の自己抑制得点の平均値(SD)

育児不安	母親の養育態度			
	権威	権威主義	許容	総和
高群	3.46(0.55)	3.31(0.61)	3.26(0.45)	3.33(0.53)
低群	3.69(0.60)	3.46(0.39)	3.41(0.44)	3.54(0.52)
総和	3.60(0.59)	3.37(0.53)	3.34(0.45)	3.44(0.53)

Figure2 母親の養育パターンと幼児の自己主張得点

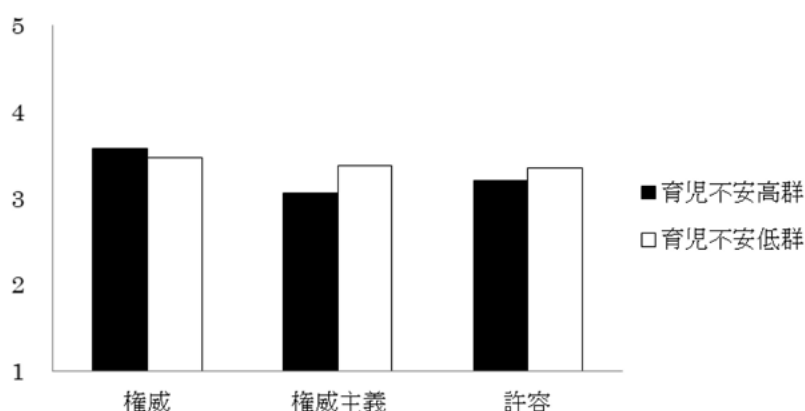


Table 6 母親の養育パターンと幼児の自己主張得点の平均値(SD)

育児不安	母親の養育態度			
	権威	権威主義	許容	総和
高群	3.58(0.66)	3.07(0.69)	3.21(0.61)	3.27(0.68)
低群	3.48(0.62)	3.37(0.50)	3.35(0.59)	3.41(0.59)
総和	3.52(0.63)	3.20(0.63)	3.28(0.60)	3.35(0.63)

## 考 察

### (1) 母親の養育パターンと幼児の自己抑制との関連

本研究では、母親の養育態度と育児不安が、それぞれ独立に、幼児の自己抑制に影響していた。

まず、育児不安群別の結果を見ることにする。幼児の自己抑制に対して、育児不安の主効果が認められることから、母親の育児不安が低い場

合の方が、幼児の自己抑制は高くなることが言える。このように、幼児の自己抑制に対して、母親の育児不安が影響していることを実証的に明らかにした研究は、著者の知る限り見られない。本研究において、新たに得られた知見であると言える。では、なぜこうした結果が認められたのだろうか。

幼児期の人格形成において、親、特に主たる養育に当たる母親は重要な役割を担うだろう。

依田・小川（1977）は、母親の精神の安定性は、子どもの精神の安定性にもつながると述べている。さらに、牧野（1988）は、育児不安が高い場合よりも、低い場合の方が、母親がより健康的であり、子どもの生活にもマイナスの影響を及ぼしにくいと述べている。これらから、母親の心理状態は、幼児の発達に影響を与えることが考えられる。よって、育児不安が低い母親の方が、幼児の自己抑制が高くなったと言えよう。

逆に、母親の育児不安が高い方が、幼児の自己抑制が低くなると捉えることもできる。三ツ元ら（2005）によると、育児不安が高い母親は、子どもの存在を、負担であると感じることが多いことを明らかにしている。牧野（1988）は、母親の育児不安が高いと幼児の生活にマイナスの影響を与えると述べている。これらから、母親の育児不安に起因する、幼児に対する負の影響が反映して、自己抑制が低くなったとも考えられる。

本研究では、母親の育児不安が幼児の自己抑制に影響を与えることを示した。このような結果が得られた背景について考察してきたわけであるが、それらの潜在的な要因については明確ではない。今後さらに実証的な検討を要するであろう。

次に、養育態度別の結果を見ることにする。幼児の自己抑制に対して母親の養育態度の主効果が認められることから、母親が権威的養育態度の場合の方が、権威主義的養育態度や、許容的養育態度に比べて、幼児の自己抑制は高くなることが言える。このように、母親の養育態度が幼児の自己抑制に与える影響についての研究は数多く見られる。

森下（2000）は、母親の受容的態度が幼児の自己制御機能を必ずしも高める訳ではないと示唆しており、幼児の自己抑制に関しては、母親

の応答性だけでは説明できないことを明らかにしている。したがって、幼児の自己抑制を育むには、適度な統制も必要であることが考えられる。本研究での権威的養育態度は、統制と応答性のどちらも機能している状態を表しており、幼児の自己抑制を高める場合に最も適していることが窺える。しかし、尾崎ら（2007）の研究では、母親の養育態度は幼児の自己抑制に影響が見られておらず、本研究の結果とは異なった。尾崎ら（2007）の研究は、養育態度の項目には、幼児の行動に対する母親の応答性を反映した項目は極めて少なく、干渉的な項目や心配を反映する項目が多かった。このように、応答性と、統制の両面を踏まえた養育態度の分類はされていない点から、幼児の自己抑制に影響を与えなかったことが考えられる。

これらのことを踏まえると、幼児の自己抑制を高めるためには、母親の養育態度は、統制と応答性のどちらも兼ね備えるものが有効であることが考えられる。

母親が権威主義的養育態度をとる場合、幼児の自己抑制は、母親が権威的養育態度の場合よりも低かった。柏木（1988）は、母親の介入・過保護は幼児の自己制御機能にマイナスの働きをしていると示唆している。ここでの介入・過保護は、母親が幼児の行動に合わせるのではなく、母親自身の行動に幼児を従わせる、統制の強いものである。本研究の、母親の権威主義的養育態度は、統制因子が高く、応答性因子が低い養育態度であり、母親が中心となって養育を行うパターンである。これは、柏木（1988）のいう介入・過保護と類似している。これを踏まえると、母親の権威主義的養育態度は幼児の自己抑制の発達には適しておらず、その結果、権威的養育態度よりも低くなったことが考えられる。さらに、柏木（1988）は、家庭での親や同胞と

の関係、また近隣での友達、保育園・幼稚園での教師や友達との生活の中で、その状況に応じて自分の意思を表現したり、あるいは自分の意思や行動を抑制したりすることを学ぶと述べている。社会の中で学んでいく場合も、幼児はまず、親を行動のモデルにして、自分の活動を広げていく。したがって、統制の高い権威主義的養育態度の母親をモデルとした幼児は、受け入れるという行動のモデルを獲得することが出来なかったために、母親が権威的養育態度をとる幼児よりも、自己抑制が低くなったことが推察される。

母親が許容的養育態度をとる場合、幼児の自己抑制は、母親が権威的養育態度の場合よりも低かった。本研究の分類では、統制が平均よりも低ければすべて許容的養育態度になるため、応答性が高い場合もあれば低い場合もある。中道ら（2003）は、応答性を「子どもの意図や欲求に気づき、愛情のある言語的・身体的表現を用いて、子どもの意図をできる限り充足させようとする行動」としている。これを踏まえると子どもが抑制すべき場面も欲求を満たそうとしている可能性も否めない。また、応答性が低い場合は、幼児に対して無関心であり、幼児の行動をなすがままにしていることも考えられる。これらを踏まえると、母親が許容的養育態度の幼児は、制約が必要な場面でも受けることが少ないことから、自分の好き勝手に行動することが多くなると推察される。いずれも、母親が権威的養育態度をとる幼児よりも、自己抑制が低くなったことが考えられる。

母親が権威主義的養育態度をとる場合と、許容的養育態度をとる場合の間には、幼児の自己抑制に差は見られなかった。このことから、母親の養育態度の統制と応答性のどちらか一方が高い状態や、どちらも低い状態では、幼児の自

己抑制は低くなることが分かる。この結果から、母親の養育態度の統制と応答性は、幼児の自己抑制を高めるためには、どちらも必要であり、両方が機能しなければならないことが分かる。

本研究では、母親の養育態度が幼児の自己抑制に影響を与えることを示した。今回、母親の応答性と統制が共に高い養育態度が、最も幼児の自己抑制が高くなった。母親の養育態度を考える場合、「統制か応答性か」「先導的か受容的か」といった二者択一ではなく、両面性に着目していく必要があるだろう。

## （2）母親の養育パターンと幼児の自己主張との関連

本研究では、母親の養育態度と育児不安が相互に関連し、幼児の自己主張に影響していた。

まず、育児不安群別の結果を見ることにする。母親の育児不安が低い場合の方が、幼児の自己主張は高くなることが認められた。幼児の自己主張に対する、母親の育児不安の影響について、実証的に明らかにした研究は、著者の知る限り見られない。本研究において、新たに得られた知見であると言える。

幼児の自己抑制でも見られたように、母親の不安が低く、安定した状態の方が幼児の自己主張が高くなっていることが窺える。母親の心理状態が幼児の自己主張の発達に影響しているものと考えられる。

次に、養育態度別の結果を見ることにする。幼児の自己主張に対して母親の養育態度の主効果が認められることから、母親が権威的養育態度をとる場合の方が、権威主義的養育態度や、許容的養育態度をとる母親に比べて、幼児の自己主張は高くなることが言える。母親の養育態度が幼児の自己主張に与える影響についての研究は数多く見られる。

森下（2000）は、幼児の自己主張について、



母親の統制的な態度が、マイナスの影響をもたらすと示唆している。それと同時に、母親の受容的な態度についても、幼児の自己主張を高める訳ではないとしている。このことから、母親の応答性要素と、統制要素が個々に作用すると、幼児の自己主張は育たないことが窺える。本研究での母親の権威的養育態度は、応答性と統制のどちらも兼ね備えているため、幼児の自己主張が最も高くなったことが考えられる。また、本研究の結果は、中道ら（2003）、尾崎ら（2007）の母親の養育態度は、幼児の自己主張に影響を与えないという結果とは異なっていた。中道ら（2003）の研究では、母親の養育態度が幼児の攻撃行動にどのように影響するのかを検討している。確かに、幼児の攻撃行動は一種の自己主張であるが、向社会的行動を伴う訳ではない。首藤（1995）の研究では、幼児の自己主張は仲間に関する向社会的行動と強く関連することを見出している。このことから、幼児の自己主張と向社会的行動は密接な関係があることが分かる。本研究では、幼児の自己制御機能尺度に関して、首藤（1995）の尺度を用いていることもあり、ここでの見解のずれが生じたと考えられる。尾崎ら（2007）の研究との見解のずれは、母親の養育態度の分類に、応答性と統制がそれぞれ機能している養育態度の分類はされていない点から、幼児の自己主張に影響を与えなかったことが考えられる。

母親が権威主義的養育態度をとる場合、幼児の自己主張は、母親が権威的養育態度をとる場合よりも低かった。これは、森下（2000）の母親の統制的態度が幼児の自己主張にマイナスの影響を与える結果と一致している。このことから、母親の統制が、単独で作用すると、幼児の自己主張は低くなるものと考えられる。さらに、自己抑制と同様、柏木（1988）の結果とも一致

している。幼児の自己主張も、統制だけが強ければ、低くなることが分かる。

母親が許容的養育態度をとる場合、幼児の自己主張は、母親が権威的養育態度をとる場合よりも低かった。これは、幼児の自己主張が、母親の服従的、甘やかしの養育態度と負の関係にあることを示した戸田（2006）の結果と一致している。ここで、幼児の自己主張が低くなった理由として、母親の統制が低い余りに、幼児が身勝手な行動をしていることが考えられる。そもそも自己主張は、柏木（1988）が「自分の意志や欲求を明確に持ち、これを他人や集団の前で表現し主張する」としているように、ただ自分の欲求を相手にぶつけるだけのものではない。幼児が他人や集団に正当なものと認められる形で自己を主張するには、社会的側面の配慮が必要であろう。そうした自己制御機能の発達には、親の養育態度として、ある程度の統制が必要ではないだろうか。よって、母親が許容的養育態度をとる場合は、母親が権威的養育態度をとる場合よりも、自己主張が低くなったことが推察される。

母親の養育態度と育児不安との間に交互作用が認められた。そこで、下位検定を行った結果、育児不安が高い場合のみ、養育態度の単純主効果が見られた。逆に言えば、母親の育児不安が低い場合は、母親がどのような養育態度をとっていても、幼児の自己主張に差が認められないということになる。藤本ら（2003）は、母親の状態不安は、受容的な養育態度に影響を及ぼしていると述べている。不安というものは育児にはつきものであり、必ずしも否定的な部分ばかりではない。深谷・植木（1986）は、人は不安があるからこそ危険を予測しようとし、それに対応しようとし、学ぼうとすると述べている。このように、育児不安が適度である場合は、

母親は育児に対してどのような不安を感じているのかに着目し、その不安から今後起こるべくことを予見しようとする。だからこそ、育児を行う上で予期せぬ事態が起こったとしても、それに対応する余裕が生まれるのではないだろうか。本研究での、育児不安が低い場合とは、こうした適度な不安状態を反映していることが考えられる。したがって、どのような養育態度でも、幼児の自己主張に差が見られなかったと推察される。

他方、育児不安が高い場合においては、母親の養育態度の単純主効果が認められていた。このことから、母親の育児不安が高い状態の場合は、母親の養育態度別に幼児の自己主張が変化することが言える。興石（2005）は、母親の育児不安が強い場合、なんとか自分の思い通りに子どもを動かそうとしたり、また反対に、なす術を持たず、子どもに対する全てを諦めて、子どものなすがままにさせてしまったりなど、不適切な養育を行ってしまいがちになると指摘している。このことから、育児不安高群では、養育態度別に幼児の自己主張が変化することが考えられる。

多重比較の結果、育児不安が高い場合であっても、母親が権威的養育態度をとっていれば、幼児の自己主張は維持されることが分かった。権威的養育態度をとる母親は、幼児の行動に配慮し、自発的な活動を引き出すような応答をしたり、統制したりすることができる。よって、母親の権威的養育態度は幼児の自己主張を高める場合に最も適していると考えられる。これらから、育児不安が高くとも、母親の養育態度が幼児にとって適切であれば、幼児の自己主張は育つということが考えられる。

しかし、育児不安が高い母親が、権威主義的養育態度をとる場合は、権威的養育態度をとる

場合よりも幼児の自己主張は低かった。この養育パターンをとる母親は、興石（2005）が指摘するように、母親自身が子どもをコントロールしようとする極端な統制行動に陥りやすいものと考えられる。その結果、幼児の自発的な活動を制御してしまうため、幼児の自己主張は低くなったことが推察される。

さらに、育児不安が高い母親が許容的養育態度をとる場合も、権威的養育態度をとる場合より、幼児の自己主張は低かった。この養育パターンをとる母親は、不安のあまり、①幼児に対しての接し方に悩み、なす術を持たず、幼児のなすがままに受容している場合と、②幼児に対して関わろうとせず、放任している場合の二つのパターンが考えられる（興石，2005）。①の場合は、母親からの統制が少ないため、幼児が自分の主張が適切なものであるのかが分らない。②の場合、幼児は、自己を表現し主張するモデルを獲得することができず、さらに、自分の意思や考えを主張してもそれに対する母親の反応がないことから、主張することを諦めてしまうのではないだろうか。こうした背景的要因から、幼児の自己主張は低くなるものと考えられるが、さらに実証的な検討が求められる。

次に、養育態度別の結果に着目すると、母親が権威主義的養育態度の場合に、育児不安の単純主効果が認められた。権威主義的養育態度をとる母親は、育児不安が高いと、幼児の自己主張が一層低くなることが言える。これは、母親が懲罰的養育群であると、幼児のひきこもり傾向がみられ、さらに育児不安も高くなっていることを明らかにした、三鈷ら（2009）の见解と一致している。中道ら（2003）によると、権威主義的養育態度をとる親は、子どもからの働きかけに対してあまり応答的に行動せず、子どもの行動を一方的に統制する行動を行いがちとさ

れている。母親が幼児の働きかけよりも、一方的に統制しようとしてしまうことで、結果的に幼児の主張が抑えられているものと考えられる。育児不安については、中津・高梨・佐々木（1996）が、母親の育児不安が高いと、育児に対して否定的な意識を強くもちやすいと述べていることから、育児不安が高い場合は、育児に対するネガティブな認識が大きいことが考えられる。一方、母親が権威的養育態度をとる場合と、許容的養育態度をとる場合は、育児不安の効果は見られなかった。権威的養育態度は、育児不安が高くても、幼児にとって適切な養育態度であるため、育児不安の効果が見られなかったことが分かる。許容的養育態度は、統制が低くとも、応答性の高い母親も含まれていることから、幼児の自己主張には、育児不安の効果が見られなかったのではないだろうか。つまり、母親が権威主義的養育態度であり、尚且つ育児不安が高い状態は、幼児の自己主張にとっては、あまり適切でない状態であることが分かる。よって、幼児の自己主張が最も低くなったと推察される。

本研究では、母親の養育態度と育児不安が相互に関連し、幼児の自己主張に影響を与えることを新たに示した。先行研究では、養育態度と育児不安がそれぞれ負の様相を示すとき、幼児の自己制御機能にマイナスの影響を与えることが明らかにされてきた。しかし、今回の研究では、育児不安が高い場合であっても、母親が権威的養育態度であれば、幼児の自己主張は変化しないことが明らかになった。また、母親が権威主義的養育態度をとる場合のみ、育児不安の高さが自己主張に負の影響を与えていた。今後はそれらの養育パターンをとる母親の具体像に迫り、幼児の自己制御機能の影響関係について論考を加えていく必要があるだろう。

## 総 合 考 察

本研究では、母親の養育態度と育児不安が、幼児の自己制御機能に対してどのような影響を与えるかについて検討するために、母親の養育態度を「権威的養育態度」「権威主義的養育態度」「許容的養育態度」の三つに分類し、さらに育児不安に関連させて、分析した。結果、幼児の自己抑制には、母親の養育態度と育児不安がそれぞれ独立に影響を与えていた。また、幼児の自己主張には、母親の養育態度と育児不安が相互に関連して影響を与えていた。したがって、幼児の自己制御機能を検討する際には、従来のように母親の養育態度に加えて、今後育児不安にも一層着目する必要があるだろう。

特に、幼児の自己主張は、育児不安が低い母親の場合、どのような養育態度で幼児に接しても、差は見られなかった。この結果から、母親の表面的に出る養育行動よりも、育児不安といった内面的なものが幼児の自己主張の発達に影響していることが分かる。よって、教育機関等の現場で不適切な養育を行う母親を支援する場合、適切な養育方法を提案するだけでなく、母親の内面理解に努めた支援を行うことが必要であろう。

今後の課題について述べる。第一に、今回の研究では、幼児の自己抑制と自己主張を、それぞれ別々に検討したため、幼児の自己抑制と自己主張の相互の関連性までは見ることはできなかった。幼児は、自己抑制と自己主張の二つの側面の機能を共に果たすことで、自己制御機能を獲得していく（柏木、1988）。このことから、幼児の自己制御機能の発達を検討するためには、双方の関連性が重要となってくる。今後、自己抑制と自己主張の関連性にも着目して、検討することが必要である。

第二に、本研究では、母親の育児不安が幼児

の自己抑制と自己主張に対して影響を与えることを明らかにした。育児不安が幼児の自己制御機能に影響を与えることを明示したものは見られていないことから、これは新たな知見である。しかし、今回の研究では、育児不安が起こる潜在的な原因は検討していない。中津ら（1996）の研究では、第1子から第4子までの子どもの出生順位や夫婦関係、母親の社会的な人間関係と育児不安との関係について検討している。結果、子どもが第1子の場合は、第2子以降の子どもよりも、育児不安が高くなっていた。このように、出生順位によって不安が変化する可能性が考えられる。さらに、育児不安は、夫婦関係や社会的人間関係によって影響を受けている。牧野（1983）が、近隣とのネットワークが狭く、夫の協力が少ない場合に、母親の育児不安が高くなることを示唆しているように、育児不安は、母親を取り巻く環境から影響を受けるものと考えられる。今後はそれらの潜在的な変数について、多角的な観点からの実証的な検討が必要であろう。

第三に、今回の研究では、母親が権威主義的養育態度をとる場合と、許容的養育態度をとる場合との間には、幼児の自己主張、自己抑制のどちらも差が見られなかった。これらの養育態度に差が見られなかった原因として、許容的養育態度の分類の仕方が考えられる。本研究では、統制が平均よりも低い場合を全て許容的養育態度として分類した。その中には、応答性が高いものもあれば、低いものも含まれている。応答性が高いものや平均のものは、許容的養育態度に分類されても問題はないが、低いものは、許容というよりは、放任や無関心の分類にも当てはまるように捉えることができる。幼児の人格形成において、親の存在は大きく影響することを踏まえると、幼児の自己制御機能は、放任や

無関心の養育をとる母親と、権威主義的養育態度や許容的養育態度をとる母親では、差が見られる可能性が考えられる。また、放任や無関心の養育に当てはまる母親は、育児不安により幼児の自己制御機能に与える影響は変化する可能性が考えられる。今後、母親の養育態度の分類を増やし検討することも必要であろう。

第四に、今回の研究では、幼児の性差において自己制御機能の差は見られなかった。しかし、中道ら（2003）や尾崎ら（2007）の研究では、性差が見られている。このことから、対象者に父親を含めることで幼児の性差が見られる可能性は否めない。幼児の発達にとって父親の影響も重要であり、軽視できないものである。したがって、今後は対象者に父親を踏まえて分析することが必要である。

第五に、今回の研究では幼児の自己抑制と自己主張の結果が異なった。本研究で用いた尺度の自己主張を測定する項目には、「～泣いたり、怒ったりする」、「～怒る」というネガティブな自己の表出も含まれている。本研究ではネガティブな表現も幼児の自己主張の一種として捉え分析した。しかし、大内・長尾・櫻井（2008）は、自己制御機能を「場面や状況に応じて、自らの情動、欲求、注意を能動的に調整し、適切に行動できる能力」とし、自己主張尺度を新たに作成している。「適切な行動」を向社会的な態度とみなすとすればネガティブな自己の表出は該当しないと考えられる。そのため、独立変数の効果が異なるかたちで現れたのではないだろうか。さらに、大内ら（2008）は、自己制御機能尺度の作成にあたり、「自己主張」、「注意の移行」、「注意の焦点化」、「自己抑制」という4つの側面に注目している。今後さらに、検討していきたい。

最後に、本研究の中心は、母親の養育態度と



育児不安が幼児の自己制御機能にどのような影響を与えるのか、基本的な知見を得ることを目的としている。よって、養育態度別の育児不安の相関は検討していない。しかし、養育態度と育児不安の間に連関傾向が見られ、幼児の自己制御機能に影響を与えていることは、今回の研究で明らかになった。今後は、養育態度別の育児不安の関係も検討したい。

### 引用文献

- 深谷和子・植木陽子 1986 母親の示す育児不安に関する一考察 東京学芸大学紀要, 37,253-261.
- 藤本昌樹・小堀友子・鈴木国威・鎌倉利光・糸井尚子 2003 母親の不安と養育態度, 子ども観に関する共分散構造モデル 小児保健研究, 62(3),359-364.
- 鎌倉利光・小堀友子・坂田知華子・鈴木国威・藤本昌樹・糸井尚子 2000 幼児の自己制御機能に影響を与える要因の分析-母親の不安傾向と幼児期の気質をもとにして- 児童育成研究, 18,24-29.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- 興石薫 2002 母親の自己注目傾向と育児不安について 小児保健研究, 61(3),475-481.
- 興石薫 2005 育児不安の発生機序と対処法略 風間書房
- 牧野カツコ 1988 〈育児不安〉の概念とその影響要因についての再検討 家庭教育研究所紀要, 10,23-30.
- 牧野カツコ 1983 「働く母親と育児不安」家庭教育研究所紀要, 4,67-76.
- 三ツ元加奈子・藤原珠江 2005 母親の育児不安と子ども観・養育態度との関連について 長崎純心大学心理教育相談センター紀要, 4,57-64.
- 森下正康 2000 幼児期の自己制御機能の発達 (1)-思いやり、攻撃性、親子関係との関連 - 和歌山大学教育学部紀要 (教育科学), 50,9-24.
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司[編] 1999 養育態度 南博文 心理学辞典第14版 有斐閣 Pp.862.
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司[編] 1999 養育態度 生和秀敏 心理学辞典第14版 有斐閣 Pp.738.
- 中道主人・中澤潤 2003 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部研究紀要, 51,173-179.
- 中津郁子・高梨一彦・佐々木保行 1996 幼稚園生活における幼児の不安感情に関する研究 - 第2報 母親の育児不安との関連について - 小児保健研究, 4,530-536.
- 岡本夏木 2005 幼児期-子どもは世界をどうつかむか- 岩波書店
- 大内晶子・長尾仁美・櫻井茂男 2008 幼児の自己制御機能尺度の検討-社会的スキル・問題行動との関係を中心に-
- 尾崎康子・小野由加利 2007 幼児期における自己制御機能発達に及ぼす父母の養育態度の影響 富山大学人間発達学研究実践総合センター紀要 教育実践研究, 2,39-44.
- リチャード・S・ラザラス, スーザン・フォルクマン, 本明寛[ほか]監訳 1991 ストレスの心理学: 認知的評価と対処の研究 東京実務教育出版
- 三鈺泰代・濱口佳和 2009 幼児期の子どもをもつ母親の養育スキルと育児不安および子どもの問題行動との関連-母親の養育スキルパ

## 母親の養育態度及び育児不安が幼児の自己制御機能に及ぼす影響

- ターンからの検討－ 発達臨床心理学研究, 20,51-57.
- 首藤敏元 1995 幼児の向社会的行動と自己主張－自己抑制 筑波大学発達臨床心理学研究, 7,77-86.
- 田中昭夫 1997 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究 乳幼児教育学研究, 6,57-64.
- 田中昭夫・尾添真希子 1996 幼児を保育する母親の育児不安を軽減する要因の検討 家庭教育研究所紀要, 18,61-68.
- 武井祐子・寺崎正治・門田昌子 2006 幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響 川崎医療福祉学会誌, 16(2),221-227.
- 手島聖子・原口雅浩 2004 育児不安の構造 久留米大学心理学研究, 3,83-88.
- 戸田須恵子 2006 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について 北海道教育大学釧路校研究紀要, 38,59-69.

- 渡辺菜緒・岩永竜一郎・鷲田孝保 2002 発達障害幼児の母親の育児ストレスおよび疲労感－運動発達障害児と対人・知的障害児の比較－ 小児保健研究, 61(4),553-560.
- 依田明・小川捷之 1977 母親：母性の氾濫と喪失 現代のエスプリ, 115.

### 謝辞

本稿の執筆にあたり、ご指導いただいた兵庫教育大学大学院准教授石野秀明先生に心より感謝申し上げます。

### 付記

本稿は、平成22年度兵庫教育大学大学院学校教育研究科提出の修士論文の一部に加筆修正を行ったものである。